研究目的

本研究は、都市における継承世代家族の住宅および住生活について、その特質と動向を初代家族のそれと比較考察しつつ明らかにすることを目的としている。ここでいう継承世代家族とは、その家の世帯主が2代目以上で、仏壇祀りをしている家族を意味する。言わば本家的な家族に相当する。一方、初代世代家族とは新しく家族を創設し、世帯主が1代目である。言わば分家的な家族に相当する。この2つの家族は、住宅および住生活（特に祭祀と接客）において相違を有していると仮説している。

これまでの住宅研究において、現在の都市独立住宅の平面は、概ね、ＬＤＫ型と続き間型に分類され、その分布傾向は大都市でＬＤＫ型が多く、地方都市では続き間型が多いという実態から、その現象を地域性によって説明されている[*1]。しかし、地域による量的な相違はあっても、それらの型は同じ地域内に混在しており、単に「地域性」の論理だけで説明することは不十分である。何故にその地域性が存在し、どのような家族でその住宅と住生活が継承されているかは不明であった。即ち、地域の中におけるそれぞれの住宅型を成立せしめている「家族」の論理の解明が必要であろう。

一方、現在の都市独立住宅の計画理念についても、快適性、効率性といった近代合理主義的論理が優先され、特に、本研究で言うところの継承世代家族にも該当する二世帯家族の住宅の考え方に至っては、それぞれの世帯の領域を単純に分離すればよいという短絡的根拠に基づいたものが多く、ここにもまた、世代間で継承されている「家族」の論理が捨象されている。

住宅とは、単なる一時期の生活の容器ではなく、その時代のその世代における家族の住生活の反映であるとともに、世代継承していく家族の反映でもある。住生活についても、その実態は就寝、食事、団欒などの家族生活だけではなく、祭祀と接客生活を含めて統一的に展開している[*2]。前者の生活は日々欠かせない日常生活として一定の合理的視点で捉えることもできようが、後者の生活は日々営む家族を円滑に展開するための重要なる非日常生活であり、これは「必要性」の論理でみていくべきであろう。

以上の問題認識と視点から、本研究は、継承世代家族における住宅と住生活について、その特質と動向を初代世代のそれと比較考察を通して明らかにし、併せてそれを規定していると考えられる「継承世代家族」の論理を探っていきたい。

今後、子供数の減少から、初代世代家族よりも継承世代家族の相対的増加が予想され、しかも、それに伴う建て替えを含めた住宅更新の展開が想定される。本研究は、その意味においても、それに対応する継承世代家族の住宅計画の理

論構築に資するものと位置づけている。